

〈研究ノート〉

# 宮崎駿による長編アニメーション映画 「もののけ姫」の構造 キアスムスの核の機能

大喜多 紀明

## 1. はじめに

映画「もののけ姫」は、スタジオジブリが1997年に公開した長編アニメーション映画作品であり、原作・脚本・監督は宮崎駿によるものである。この作品に関する従前の研究では、しばしば、文明と自然（あるいは人間と自然）の関係性から論じられてきた（例えば、箕野（2017）、角（2016）、高木（2010）、堀（2008）、秋田（1998）など）。本稿では、まず、「もののけ姫」の物語構造について、キアスムスの観点からの分析を試みる。そのうえで、当該キアスムスにおける「核」がいかなる要素によって構成されているかの調査をおこなうことにする。

従来、キアスムスにおける核は、作品のストーリーにおける隠されたメッセージの指標を示すものとされ（森：2007）、かつ、ストーリーのクライマックス要素として位置付けられる（例えば、Smith：2007）と考えられてきた。本稿では、かかる前提に基づき、「もののけ姫」を題材に、キアスムスの核が示す、メッセージの指標およびストーリー上のクライマックスについての検証をおこなう。そのうえで、堀（2008）が提示した、「もののけ姫」における、文明と自然（あるいは人間と自然）の対立の観点と、本稿におけるキアスムスの核が示す知見がいかなる関係にあるかの考察をおこなうことにする。

## 2. 自然と文明の対立

堀（2008）は、宮崎の「未来少年コナン」、「風の谷のナウシカ」、「天空の城ラピュタ」が、「自然に対する憧憬」と「自然を破壊する文明・技術への不信感」の表現という文脈を形成しており、「もののけ姫」も、かかる文脈上に位置付けられるものの、同時に、当該作品が、単なる「善悪の二元的な図式」ではなく、自然自体に内包する「暴力性」を描くことにより、単純な「自然との共生」の矛盾点を提示するという特質性を持つことを述べた。また、新たな次元の「人間と自然の共存の道」を示す存在として、アシタカとサンの関係性を位置付けた。以下、堀（2008）を引用する。

物語の最後、二人は心を通わせながらも、アシタカはタタラ場に残り、サンは山犬の兄弟と共に森に帰っていく。別れ際、少年は少女に会いに、時々森を訪ねることを約束する。二人の愛は人間と森の対立を止揚することはない。シシ神の森は、すでに里山へと変わり、たとえ、エボシたちが新しい村作りを目指したとしても、人々はさらに森を伐採しなくてはならないであろう。森の神々の運命は、史実を振り返れば、決して、明るいものではなく、アシタカとサンに待ち構える運命の困難さも予想される。自然と人間がもつ、自己生存をかけた、暴力性は、決して、消し去ることはできないのだ。その後、二人は末永く幸せに暮らしました—という、メルヘンの結末は、アシタカとサンには許されていない。

このように、アシタカとサンの関係は、止揚することのない人間と自然の対立を象徴している。さらに、堀（2008）は次のように述べた。

アシタカが命をかけてサンを救った時、彼女に、「生きろ。そなたは美しい」と語ったが、物語の最後で、彼の言葉は「共に生きよう」に変わる。この時、私たちはアシタカの言葉に、彼のさらなる決意をみるのである。二人が互いに譲れない立場に踏み留まりながらも、そして、人間と自然の葛藤という答えの出せない問題を抱えたまま、それでも解決の道を模索しながら生きていくという、覚悟の表われとして理解することができる。

つまり、簡単に言えば、アシタカとサンの「互いに譲れない立場」での矛盾と葛藤が、人間と自然の矛盾と葛藤でもある。以上を換言すれば、「もののけ姫」は、人間と自然の矛盾と葛藤を、アシタカとサンの関係性から描いた物語であるといえる。

### 3. テキスト

本稿では、「もののけ姫」の分析をおこなうのであるが、当該分析対象は映画であるので、下記の、筆者によるあらすじをテキストとする。テキストには筆者によるアルファベット・記号を付してある。なお、あらすじを作成するにあたり、実際の映画「もののけ姫」以外に、web ページ“もののけ姫のあらすじをネタバレ！”(Legend anime)、および、“ストーリー・あらすじ”(SINGLELINE.LLC)を参考にした。

—あらすじ

〔A〕 大和朝廷と対抗する立場であるエミシの村にアシタカが住んでいた。エミシの村にタタリ神が来襲する。アシタカはこれを弓矢で撃退するも、右腕に、痣のような死に至る呪いを受けることとなる。アシタカは、西の地へと出発する。その際、アシタカの許嫁であるカヤがアシタカを見送る。カヤは、アシタカに、自らの短刀の飾りの宝物を授与する。〔/A〕〔B〕 西の地に向かう途中、2人の侍が農民たちを襲うのを目撃する。アシタカはこの侍たちを殺害する。アシタカはジコ坊と会う。峠でエボシ御前一行がサンと山犬に襲撃される。ジコ坊はシシ神の森のことをアシタカに伝える。アシタカはジコ坊と道中を共にする。サンと山犬がタタラ場の人たちを襲う。アシタカはサンを目撃する。サンは去るが、アシタカは怪我をした男たちを助け、森の奥の方へと向かう。〔/B〕〔C〕 アシタカはタタラ場にたどり着く。アシタカはエボシ御前により、タタラ場を案内され、女たちがタタラを踏む様子を見る。アシタカは、森とエボシ御前との対立関係を知る。〔/C〕〔D〕 サンがタタラ場を襲撃する。サンはエボシ御前と直接戦うものの、アシタカが間に入り、サンとエボシ御前を気絶させる。〔/D〕〔X /〕 アシタカは気絶したサンを抱えて逃げるが、石火矢に撃たれることにより怪我を負い、瀕死の状態になる。〔/ X〕〔X ´ /〕 意識を取り戻したサンは、アシタカを殺そうとするが、アシタカの「生きて、そなたは美しい」の言葉に思いとどまる。サンはアシタカをシシ神のもとに連れてゆく。シシ神により、アシタカの怪我は奇跡的に治癒される。〔/ X ´〕〔D ´ /〕 サンは「シシ神様が助けたから、お前を救う」とアシタカに告げ、アシタカの面倒を見る。〔/D ´〕〔C ´ /〕 アシタカはサンや山犬と生活をする。そこで、イノシシたちはタタラ場の襲撃を検討するなど、アシタカはタタラ場と森の対立を、森の立場から目撃する。〔/C ´〕〔B ´ /〕 エボシ御前たちは、イノシシたちを挑発する。挑発に乗ったイノシシたちはエボシ御前たちに攻撃を仕掛ける。それにより、イノシシたちとエボシ御前たちの戦いが開始する。タタラ場には侍たちが襲撃する。イノシシたちはジコ坊たちにより全滅し、エボシ御前はシ

シ神の首を落とす。〔B´〕〔A´/〕 シシ神から液体が流れ出し、それに触れたものが死ぬ。また、植物も枯れる。さらにタタラ場も甚大な被害を受ける。サンは人間たちへの憎悪を募らせるも、アシタカによりなだめられる。アシタカとサンはシシ神の首をエボシ御前から取り上げシシ神に返す。ダイダラボッチへの変化していたシシ神は、朝日を浴びることにより消える。エボシ御前は村の再建することを宣言する。アシタカの死に至る呪いが除去される。サンは「アシタカは好きだが、人間は好きになれない」とアシタカに告げる。アシタカはサンに「それで構わない。サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。会いに行くよ」と返答する。その後、アシタカはタタラ場の人たちとともに村に住む。荒廃した森に、コダマが再び出現する。〔A´〕

#### 4. キアスムス

1節で述べた通り、本稿における分析手法は、キアスムスの観点によるものである。キアスムスとは、一般的には、同心円状に複数の要素対が配列した、下記のような文章表現の形式のことをいう。

$$A \cdot B \cdot C \cdots X \cdots C' \cdot B' \cdot A'$$

ここで、 $A \cdot A'$ 、 $B \cdot B'$ 、 $C \cdot C'$  は、キアスムスを構成する要素対であり、X（ギリシャ語の「カイ」）は、キアスムスの折り返しに配置された要素である。このXを、本稿では「核」と呼ぶことにする。なお、要素対の組数は、上述の事例のような3組に限定されることはない。最低限の要素対の組数は2組である。また、核には、対をなすタイプと対をなさないタイプがある。上述の事例は対をなさない核の事例であり、下記は、対をなす核の事例である。

$$A \cdot B \cdot C \cdots X \cdot X' \cdots C' \cdot B' \cdot A'$$

ここで、キアスムスの核が対でないものを「集中構造」あるいは「コンチェントリック」と呼び、キアスムスと区別する場合がある（例えば、森（2007））のだが、本稿では、かかる区別をおこなわないことにする。

以下は、旧約聖書・創世記 17 章 1～25 節にみとめられるキアスムスの実例である（McCoy：2003）。

- A Abram's age (17:1a)
- B The LORD appears to Abram (17:1b)
- C God's first speech (17:1c-2)
- D Abram falls on his face (17:3)
- E God's second speech (emphasizing "names/ kings/nations") (17:4-8)
- X God's third/most important speech (emphasizing "the covenant") (17:9-14)
- E' God's fourth speech (emphasizing "names/kings/ nations") (17:15-16)
- D' Abraham falls on his face (17:17-18)
- C' God's fifth speech (17:19-21)
- B' The LORD goes up from Abram (17:22-23)
- A' Abraham's age (17:24-25)

このキアスムスは、A・A'、B・B'、C・C'、D・D'、E・E' という、合計5組の要素対によって構成されている。また、このキアスムスの核(X)は対を持たない。つまり、このキアスムスの核は、対をなさないタイプである。この実例のように、キアスムスに関連する多くの研究は聖書テキストを題材とするもの（例えば、Breck：1987）なのであるが、聖書以外のテキストにおいてもキアスムスは広範にみとめられている（松村：2020）。

続いて、キアスムスの核の機能についてである。聖書テキストを分析した森（2007）は、かかる核が、下記のように、テキストの構造上の中心としての形式的機能と、テキストの隠されたメッセージの指標としての内容的機能を持つという見解を述べた。

さて、何対かの対応に囲まれて構造の中央に位置しているのが〈核〉である。テキストの各要素は対応を重ねながら、この核にむかって集中する。そして、しばしばそこにテキストの隠れた意図の集約的表現が見受けられる。その意味では、核はテキストの構造上の中心としての形式的機能を持つだけでなく、テキストに隠されたメッセージの指標として内容的機能をも担っているといえよう。

また、聖書テキストを分析した McCoy（2003）は、核がキアスムスの中央に位置するクライマックス的な要素（central and climactic component）であることを述べた。聖書テキスト以外を題材としたものでは、例えば、『Crónica de Veinte Reyes』の「Cantar de mio Cid」を分析した Smith（2007）は、かかる核の機能について次のよ

うに述べた。

In order for chiasmus to work properly, the parameters under which it operates need to be clearly understood. First, a common theme usually defines the context. This context could be a verse, a phrase, a sentence, a paragraph, or even an entire story. With chiasmus, the necessary traits are that the structure be repeated backwards. Often there is a central focal point around which the chiasitic structure revolves. This is the ‘crux’ of the argument. Some studies have shown how a chiasitic construction can draw attention to the center of the inversion to convey a certain message. Chiasmus is not capricious, but rather it is often used as a tool to bring attention to a given issue.

つまり、キアスムスの構造は、複数の要素対と核からなっており、核を境に、物語は反転する。かつ、かかる核では、しばしば、物語の主要なメッセージが述べられる。以上より、本稿では、核の機能が以下の2点であると仮定し、これを本稿における前提とする。また、本稿では、テキストが聖書であるか否かが核の機能に影響を与えないこととし、これを本稿における前提とする。

#### ◆核の機能

- ①構造上の中心としての形式的機能
- ②メッセージの指標あるいは物語のクライマックスとして内容的機能

キアスムスの中央の折り返し箇所に核が位置していることは、当然に、キアスムスの構造上の中心に核が配置されていることを意味する。換言すれば、かかる形式的機能は、キアスムスの構造上の当然の機能である。それに対し、内容的機能は、形式から導出されるような当然の機能であるとはいえない。かかる前提に基づけば、キアスムスをテキスト分析の手段とした場合、核の機能（特に内容的機能）に注目することにより、当該テキストに関する有用な情報を得ることが期待できることを示している。本稿では、まず、テキストがはたしてキアスムスに基づく構造を持つかの確認をおこなう。そのうえで、かかるキアスムスの核がどのような機能を持つかの調査をおこなうこととする。

なお、宮崎の「もののけ姫」以外のアニメーション作品では、「風の谷のナウシカ」（大喜多:2017）や「天空の城ラピュタ」（大喜多:2015）、「崖の上のポニョ」（大喜多:



2017)、「千と千尋の神隠し」(大喜多:2014)などの構造がキアスムスからなることについては示された。一方、それぞれの作品における核の内容的機能については検証されていない。「もののけ姫」については、キアスムスの観点からの検証はおこなわれていない。かつ、「もののけ姫」を含むすべての宮崎の作品における核の内容的機能に関する検討は、現在までおこなわれていない。

## 5. テキストの構造

本節では、3節で示したテキストについて、筆者が付したアルファベット・記号に基づいておこなった図式を示す。

- A 死に至る呪いを受けるアシタカ
- B 村を舞台とした戦
- C タタラ場と森の対立 (タタラ場の視点)
- D サンを助けるアシタカ
- X 怪我をするアシタカ
- X´ 怪我が奇跡的に回復するアシタカ
- D´ アシタカを助けるサン
- C´ タタラ場と森の対立 (森の視点)
- B´ 森を舞台とした戦
- A´ 死に至る呪いが除去されるアシタカ

かかる図式に基づけば、 $A \cdot A'$ 、 $B \cdot B'$ 、 $C \cdot C'$ 、 $D \cdot D'$ の要素対および、核としての $X \cdot X'$ がみとめられる。

以下、各要素対の対応に関する説明をおこなう。はじめに、 $A \cdot A'$ についてである。Aでは、エミシの村に突然タタリ神が来訪し、それをアシタカが撃退する。それにより、アシタカは死に至る呪いを受ける。これがきっかけとなり、アシタカは「西の地」への訪問を開始する。また、アシタカには、カヤという同族の許嫁がいる。それに対し、A´では、傷を受けた乙事主がタタリ神になりかけるものの、シシ神によって命を奪われる。アシタカとサンは、シシ神の首を返すとともに死の液体を浴びるが死ぬことはなく、結果的にはアシタカの死に至る呪いは除去される。その後、アシタカはサンと心を通わせ、アシタカはタタラ場の人たちとともに村に住むことになる。

	タタリ神	アシタカへの呪い	訪問	結婚
A	来訪し村を襲撃する	発生	開始	否定
A´	未然に命を奪われる	除去	終了	暗示

つまり、Aでは、タタリ神は村を襲撃するが、A´では、それが未然に防がれる。また、Aでは、アシタカへの呪いが発生し、アシタカの訪問が開始し、カヤとの結婚が事実上否定される(後に、カヤがアシタカに渡した宝物である短刀がサンに贈与される)が、A´では逆に、呪いが除去され、訪問は事実上終了し、サンとの結婚が新たに暗示される。

続いて、B・B´についてである。BとB´では、ともに、戦の様子が描かれている。Bでは、サンと山犬がタタラ場の人たちを襲う。その舞台は森(自然の領域)ではなく村(人間の領域)である。それに対し、B´では、逆に、森に棲むイノシシや山犬などが人びとにより襲われる。その舞台は森(自然の領域)である。

	襲撃される側	戦の舞台
B	人びと(人間の領域)	村(人間の領域)
B´	動物たち(自然の領域)	森(自然の領域)

つまり、Bでは、人の住む場所(人間の領域)に、森(自然の領域)の立場であるサンたちが襲撃を加えているのに対し、B´では逆に、森(自然の領域)に人びと(人間の領域)が襲撃している。

CとC´は、タタラ場と森の対立が描かれている。Cでは、アシタカはタタラ場(人間の領域)におり、かかる対立を、タタラ場にいるアシタカの視点から描いている。対し、C´では、アシタカは森(自然の領域)に棲むサンとともにおり、かかる対立を森にいるアシタカの視点で描いている。秋田(1998)は、ここでのアシタカとサンの関係が、異類女房譚(古川:1988)の一種としての「犬神女房」である可能性を指摘した。以下は秋田(1998)の当該箇所である。

主人公の男性(アシタカ)と一時期のみ共にすごし、戦いに敗れやがて森に消えて行く。彼女を動物女房それも「犬神女房」としてみることは不可能だろうか。人と交わず、山犬と行動を共にし、文明化に抵抗するサン。人間であることを否定するようなペイントを施し、牙を思わすネックレスを身につけ、山犬になり切ろうとするサンは恰も犬神に取りつかれたかのように見える。同じ異類女



房でありながら、disappearing animaのようなはかなさを感じさせるのではなく、むしろ通常以上に強い生命力、動物的生命力を感じさせる。

たしかに、ここでのアシタカとサンは擬制的な婚姻関係を思わせる。だが、この時点で、サンの内面は婚姻関係を結ぶほどの成熟を遂げていない。むしろ、後の場面における、サンがアシタカに「アシタカは好きだが、人間は好きになれない」と素直な気持ちを伝え、アシタカが「それで構わない。サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。会いに行くよ」と応じた時点（これは要素A'の範囲である）で、実際には双方の気持ちを通じ合い、それによって、本格的に「犬神女房」的な関係が開始したと思われる。

アシタカの視座

C タタラ場（人間の領域）

C' 森（自然の領域）

D・D' についてである。DとD'は、ともに、「救い」がテーマである。Dでは、タタラ場へ乗り込んだサン（自然の領域）を、エボシ御前が反撃し、サンが気絶する。それをアシタカ（人間の領域）が救出する。それに対し、D'では、サン（自然の領域）は、「シン神様が助けたから、お前を救う」とアシタカ（人間の領域）に宣言し、その面倒を見る。

救う側

救われる側

D アシタカ（人間の領域） サン（自然の領域）

D' サン（自然の領域） アシタカ（人間の領域）

以上のように、D・D'は、双方とも「救い」がテーマであるものの、DとD'では、救う側と救われる側が逆転している。

核であるX・X'は対応関係にある。XとX'は、ともに、「怪我」がテーマである。Xでは、アシタカは石火矢に撃たれ怪我を負い、その後に気を失う。一方、X'では、負った怪我がシン神により奇跡的に治癒される。

アシタカ

X 怪我を負う

X' 怪我が治癒

以上のように、テキストは、 $A \cdot A'$ 、 $B \cdot B'$ 、 $C \cdot C'$ 、 $D \cdot D'$  がそれぞれ要素対であり、かつ、それらが、核である  $X \cdot X'$  を中心に同心円状に配列している構造であるのでキアスムスである。なお、すべての要素対はそれぞれ対照的な関係にあるため、この構造は、キアスムスのなかでも構造上の下位の概念である「裏返し構造」(大林：1979)に相当する。

## 6. 核の機能

5節では、テキストがキアスムス構造であることを示した。かかる構造における前半要素は  $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$  と配列しており、後半要素は  $D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$  と配列している。前半要素から後半要素へと物語を反転させる核は  $X \cdot X'$  である。つまり、当該キアスムスの核は、対をなすタイプである。ここで、核には形式的機能と内容的機能とがある。このテキストにおいては、核は、アシタカが「怪我を負う」という出来事と、「怪我が治癒する」という出来事である。テキストのキアスムス構造における中央は当該箇所であり、これを中心としてテキストのストーリーが構成されている(核の形式的機能)。また、核の内容的機能は、メッセージの指標あるいは物語のクライマックスを表示するというものである。かかる前提に基づけば、アシタカの怪我とその治癒が、メッセージの指標あるいは物語のクライマックスである。

一方、2節では、当該作品について、堀(2008)が、「アシタカとサン」の「互いに譲れない立場」での葛藤が、人間と自然の葛藤であり、当該作品が、「人間と自然の葛藤を、アシタカとサンの関係性から描いた物語」であるという見解を示したことを述べた。

本節では、アシタカとサンの関係性の観点から5節のキアスムスを再評価し、かつ、当該核の内容的機能に関する考察をおこないたい。

まず、Aではアシタカはサンと出会っていない。むしろ、アシタカには許嫁であるカヤの存在がある。それに対し、A'では、アシタカとサンは心が惹かれあう(結婚を暗示した)関係である。Bでは、アシタカは、村を襲撃するサンを目撃するが、両者の関係は未だ構築されていない。それに対し、B'では、両者は協力して戦に臨んでおり、信頼関係が構築されている。Cでは、アシタカは、タタラ場と森の対立をタタラ場の立場から観ており、サンとの関係は未だ構築されていない。それに対し、C'では、かかる対立を森の立場から観ており、サンとの関係は良好である。Dでは、アシタカはサンを助ける。それに対して、D'では、サンがアシタカを助ける。ここで、

サンがアシタカを助けた理由は、Xにおいて怪我をしたアシタカをサンがシシ神のところへ連れてゆき、X´においてシシ神がアシタカを助けたことによる。つまり、X´では、サンはアシタカを助ける決断をしていない。むしろ、サンは、アシタカにより自分が助けられたにも関わらず、これを助けるか否かの決定をシシ神に一任した。そのうえで、D´では、サンは、シシ神の決断を受け、アシタカを助ける意思決定をするのである。以上を図式化すると次のようになる。

A 無関係

B 未構築

C 未構築

D サンを助けるアシタカ

X 怪我をするアシタカ

X´ アシタカの生死をシシ神に一任するサン

D´ アシタカを助けるサン

C´ 良好

B´ 信頼関係

A´ 心を惹かれあう関係

つまり、物語の前半(A・B・C・D)では、アシタカとサンの信頼関係は構築されていない。それに対し、物語の後半(D´・C´・B´・A´)では双方の信頼関係が構築されている。こうした信頼関係の構築は核(X・X´)においてなされる。しかも、かかる構築をするか否かの判断は、そもそもサンの意思によるものではない。サンは、アシタカの生死をシシ神に一任したのである。つまり、当該核の内容的機能には下記の㊦および㊧の特徴があるといえる。

◆「もののけ姫」における内容的機能の特徴

㊦アシタカとサンの信頼関係の構築

㊧シシ神の介入

まず、㊦のアシタカとサンの信頼関係の構築についてである。この作品では、人間と自然の葛藤と矛盾が、アシタカとサンの関係性から述べられている。かかる人間と自然の葛藤と矛盾、あるいは、アシタカとサンの葛藤と矛盾は、互いに譲り合うことができない立場でありながら(堀：2008)も、互いに特別な信頼関係を構築するこ

とによりもたらされるものであるといえる。こうした葛藤と矛盾が生じるうえでの前提の一つが、両者の堅固な信頼関係にある。仮にアシタカとサンとの信頼関係が構築されなかったとすれば、この作品は、単なる人間と自然の対立を描いた作品となるのであり、そこに双方の矛盾は生じることはない。

ここで、㊦の特徴が生じるにあたり、㊤のシシ神の介入の要素を看過することはできない。アシタカは当初、サンとの信頼関係の構築を願っていた。ところが、サンがシシ神のもとにアシタカを連れてきて、アシタカの生死をシシ神に委ねた時点では、アシタカは意思を表示することができる状況ではなかった。一方、サンの「シシ神様が助けたから、お前を救う」という言葉にあるように、かかる信頼関係構築の開始は、サンの意思には基づいておらず、むしろ、シシ神という超越した存在（カミ）の意思によるものである。だが、そこにサンの意思がまったくなかった訳ではない。サンは、そもそもアシタカに惹かれる気持ちがあったのだが、どのように対処してよいかかわからず、かかる対処をシシ神に一任したのである。つまり、サンのなかではアシタカへの気持ちは成熟していなかった。だが、シシ神の意思の介入によって成熟に向かい始め、後々、気持ちが顕在化されるためのきっかけとなった。また、それにより、双方の信頼関係の構築が開始したといえるのである。ここで成熟を開始したサンは、A´で「アシタカは好きだが、人間は好きになれない」と素直な気持ちを述べるに至る。

アシタカとサンの関係は、人間と自然の関係を象徴している。シシ神により結びつけられたアシタカとサンの関係は、決して十全に交わることがなかった人間と自然の関係を、新しい関係へと導くものであった。だが、内在する矛盾は未だ解決していない。むしろこうした矛盾を抱えつつ、シシ神は、人間と自然の「惹かれあう」関係を顕在化させたのである。

## 7. 宮崎の環境思想とシシ神

映画の最終場面近くで、シシ神はその姿を消す。また、シシ神から流れ出た液体の影響で、豊かな森が消滅する。これは、豊かな森に君臨するシシ神の終焉を意味する。映画の最終場面で、コダマが出現することにより、自然の回復とシシ神の復活が暗示される。だが、ここで回復する自然は、かつての自然ではない。人間と自然の矛盾した関係により構築される新たな「自然」なのである。つまり、自然のなかに棲むシシ神が、復活により、人間と自然の新たな関係のなかに棲む存在へと変化したと解釈できる。

角（2016）は、宮崎が作品を通じて示した環境思想について以下のように述べた。

人間が変えてしまった自然も、人間の思惑とは異なった形で新たなバランスを取り戻すこともある。原生自然こそが「絶対的に正しい」のではなく、また、偶発的に生まれた里山が「絶対的に正しい」のでもなく、バランスの取れた自然を肯定的に捉え、それを維持していくことこそが「正しい」環境認識、あるいは環境思想であると、ジブリ映画が訴えかけていることを私たちは知るべきである。

アシタカとサンらによって作りだされるであろう、新しい人間と自然の関係は、かつての「原生自然」ではない。また、かかる新しい人間と自然の関係は偶発的に「里山」になる可能性はあろうが、それは決定事項ではない。むしろ、角の言葉を借りれば、「バランスの取れた自然を肯定的に捉え、それを維持していくこと」で、偶発的に出現するであろう新たな環境をも、いわばカミ（「もののけ姫」ではシシ神）の手によるものととらえることが、宮崎にとっての「正しい」環境思想なのである。さらに、かかる環境思想を作品中で体現した存在がシシ神であり、キアスムスの核の場面において、シシ神は、サンの一任によりアシタカとサンを結びつけた。このシシ神の介入を中心とした出来事が、この物語のクライマックスである。だが、その後の世界については、アシタカとサンに一任されるのである。

## 8. おわりに

本稿では、「もののけ姫」の構造をキアスムスの観点から分析するとともに当該キアスムスにおける核の機能を評価した。その結果、当該作品の核は、構造上の中心としての形式的機能と、メッセージの指標あるいは物語のクライマックスとしての内容的機能の双方の特徴を持つことがわかった。4節では、宮崎による「風の谷のナウシカ」、「天空の城ラピュタ」、「崖の上のポニョ」、「千と千尋の神隠し」などの構造もキアスムスからなることを述べた。こうした作品におけるキアスムスの核の機能についても、今後検証するつもりである。

## 引用文献

- Breck, J, 1987, Biblical chiasmus: exploring structure for meaning, *Biblical theology bulletin*, 17(2), pp. 70-74.
- McCoy, B, 2003, Chiasmus: An Important Structural Device Commonly Found in Bib-

- lical Literature, *Chafer Theological Seminary Journal*, 9, pp. 18-34.
- Smith, B, 2007, Chiasmus and Prosification of the Cantar de Mio Cid in the Crónica de Veinte Reyes, *Enarratio* 14, pp. 152-180.
- 秋田巖、1998、「異類女房」としての綾波レイ（『新世紀エヴァンゲリオン』）とサン（『もののけ姫』）、『人間・文化・心：京都文教大学人間学部研究報告』、(1)、39 - 48、京都文教大学人間学部。
- 大喜多紀明、2014、「アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問譚構造について：ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合」『国語論集』、(11)、77 - 89、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。
- 大喜多紀明、2015、「宮崎駿のアニメーション映画『風の谷のナウシカ』および『天空の城ラピュタ』を題材としての構造分析」『北海道言語文化研究』、(13)、103 - 122、北海道言語研究会。
- 大喜多紀明、2017、「長編アニメーション映画『崖の上のポニョ』の構造分析：2編の小さな異郷訪問譚の接合」『人間生活文化研究』、(27)、1 - 13、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大林太良、1979、「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(2)、1 - 9、日本口承文芸学会。
- 角一典、2016、「ジブリ映画の環境思想：日本的風土に関わる考察」『北海道教育大学紀要・人文科学・社会科学編』、66(2)、73 - 88、北海道教育大学。
- 高木学、2010、「宮崎駿作品と環境問題をめぐる社会学的試論」『相愛大学研究論集』、26、77 - 93、相愛大学。
- 古川のり子、1988、「異類女房譚の分析」『学習院大学上代文学研究』、(13)、17 - 24、学習院大学。
- 堀郁、2008、「私たちは自然と共生できるのか？：『もののけ姫』の哲学的考察」『総合政策研究』、(28)、99 - 107、関西学院大学。
- 松村一男、2020、「三つの構造：キアスムス、プロップ、レヴィ=ストロース」『和光大学表現学部紀要』、(20)、79 - 98、和光大学表現学部。
- 箕野聡子、2017、「スタジオジブリと近代文学（その2）『もののけ姫』と永井荷風『狐』」『神戸海星女子学院大学研究紀要』、(55)、93 - 102、神戸海星女子学院大学。
- 森彬、2007、『ルカ福音書の集中構造』、キリスト新聞社。
- Legend anime、“もののけ姫のあらすじをネタバレ！”、Legend anime、<http://legend-anime.com/archives/388>、(参照、2021年5月10日)。
- SINGLELINE.LLC、“ストーリー・あらすじ”、映画スクエア、<https://www.eiga-square.jp/title/mononokehime/plot>、(参照、2021年5月10日)。